

一貫したテーマを追究した生徒は 自己の進路選択に対して高い満足感を得られるか

鈴木 克彦・竹内 史央
寺井 一・大林 直美
福谷 敏・中野 和之

【抄録】 総合人間科において、高1から個人研究テーマに一貫性がある生徒は、高3時においてもより自分の夢や人生の目標に適った満足度の高い進路選択をすることを統計的に見た結果、その傾向が高いことがわかった。

【キーワード】 総合人間科、追究テーマ、一貫性、進路決定、満足感

1. はじめに

本校では高校1年生は、「生命と環境」をテーマにフィールドワークや個人研究を行い、年度末に口頭発表及び研究集録に小論文を発表する。高2では沖縄研究旅行をフィールドワーク先にした全体テーマを設定するため、グループ研究が主体になるためテーマの個人間の差異はない。高1では「生命と環境」という大テーマなので、教科で言えば理科・社会的な内容だが、実際には各個人の主体性に任せた個別の研究テーマを設定する。そのため中には将来の進路・キャリア選択に関する内容の研究を各個人で行う者も多く、実際に私が本年度担当した第5グループ「家政・生活・保育系統と教員養成系統」の中の幾人かは、高1から追求し続けたテーマを持ち、進路選択や将来のキャリアに生かしたいと考えている者が多かった。彼らに接しているうちに、高1からテーマの一貫性がある生徒は、高3時においてもより自分の夢や人生の目標に適った満足度の高い進路選択をするように感じられた。また逆に高1時のテーマとは別のテーマをもつ生徒は、進路選択の迷いが多く、自信がなさそうに見える、進路選択にも不満があるように見えた。そこで高1時の個人テーマ、高3時の個人テーマ、実際の進路選択（大学学部、職業選択）との関連性を調査し、3者の一貫性が大きい生徒ほど進路選択に自信を持って行うことができたのかを、テーマの一貫性と最終進路決定の満足度を数値化し、比較することで検証しようと考えた。

本論文には本年度の授業実践のねらいや形態がわかるように指導実践の記録も併載した。

2. 高1時の個人テーマと高3時の個人テーマの一貫性と進路選択

①計画

高3学年末に生徒が書いた研究集録論文タイトルとその内容と高1時に書いた研究集録論文タイトルとその内容との一貫性、また高3学年末に生徒が書いた研究集録論文タイトルとその内容と実際の決定進路（大学学部、

職業選択）との一貫性の2項目について、次の判断基準により4件法により評定を行った。また公平性を保つために、名前の部分を隠し、タイトルと論文内容だけから評定を行った。

- 4 一貫性がある
- 3 やや一貫性がある
- 2 一貫性はあまりない
- 1 一貫性がない

また実際の進路決定に対する満足度を担任に次の判断基準で評定してもらった。これは本来卒業時に本人たちに聞くのがよいのだが、本研究調査が卒業後に行われたため、最も本人たちを掌握できている担任に判断してもらった。その基準は次の4段階である。

- 4 満足している
- 3 やや満足している
- 2 やや不満である
- 1 不満である

「高1－高3テーマ一貫性(A)」「高3テーマ－進路選択の一貫性(B)」は私が評定した。「決定進路の満足度(C)」は担任により評定された。

また通常大学受験校を決定する際、大きく物を言うのが生徒各自の成績である。この成績についても調査の対象とした。学年末の評定平均を次のように4段階に分類した。

- 4 4.5以上
- 3 4.4～3.5
- 2 3.4～2.5
- 1 2.4以下

本論文執筆が夏休み中だったため、3クラス中2クラスの担任から決定進路の満足度調査ができなかったことと当該2クラス76名14名が浪人となり、彼らを進路選択中として対象としなかったことから対象生徒は62名である。

「高1－高3テーマ一貫性(A)」「高3テーマ－進路選

択の一貫性 (B)」「進路選択の満足度 (D)」「成績 (E)」とし、それぞれの生徒について各項目毎に評定した。A + Bの得点の高い生徒ほどCの得点が高いのではない。反対にA + Bの得点の低い生徒ほどCの得点が高いのではないかというのが、私の仮説だ。そこでA + Bが7以上の生徒 (一貫性高群) とA + Bが4以下の生徒 (一貫性低群) のCの得点とをt検定で比較する。また、次に成績と満足度の相関を見る。

②結果

「高1 - 高3 テーマ一貫性 (A)」「高3 テーマ - 進路選択の一貫性 (B)」「進路選択の満足度 (C)」「成績 (D)」は表1のような結果が得られた。

表1. テーマの一貫性と決定進路の満足度及び成績 (N=62)

	A	B	C	D
平均	2.38	3.41	3.48	2.79
標準偏差	1.18	.95	.72	.75

(A) では<2.38>という (B) に比べ低い平均値が得られた。高1では必ずしも進路を意識したテーマ設定とはしていないということであり、当然予想されることである。

(B) では<3.41>という (A) に比べ高い平均値が得られた。高校3年生での進路を意識したテーマ選択がなされたことが伺える。この (A) (B) の差については、表2に示されたような一元配置の分散分析を行った。

表2. 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	F
グループ間	55.44	1	55.44022	43.5756	4.32401
グループ内	231.55	182	1.272277		
合計	286.99	183			

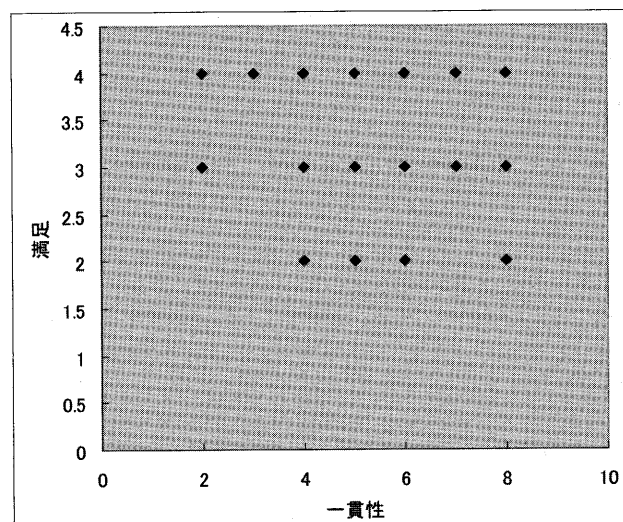
その結果、表2に見られるように条件の要因は有意であった。(F (1,182) = 4.32, P < .05) したがって、(B) は (A) を上回る値を示したと言える。

(D) では<3.48>という (A) (B) に比べ非常に高い平均値が得られた。担任は決定進路への生徒の満足度が全般的に高いと判断している。

ところで (A) (B) の合計得点の数値は、高1からの一貫性が高いほど大きい数値になることが推測できる。そこで (C) との相関が高ければ、高1テーマ - 高3テーマ - 進路決定の一連の行為の結果が決定進路に対する高い満足感が得られたと言える。(A) (B) の合計得点と (C) とのグラフに表すとは次の図1のようになった。

(A) (B) を合わせた得点が表すものを「一貫性度」としてX軸とし、(C) の決定進路の「満足度」をY軸とした。

図1. テーマ一貫性と決定進路満足度



一貫性度が高くても不満 (2) の者もいるし、一貫性度が低くても満足 (3, 4) の者もいる。一貫性度と満足度の相関は $r=.11$ で相関はないことが分った。

しかし私は一貫性度が高い者は進路選択の満足度が高いと考えたので、一貫性度の得点が非常に高い者と一貫性度の得点が非常に低い者を抽出して比較するために2群に分けて比較を行った。

群分けは一貫性度が7以上の生徒 (n=23) を「一貫性高群」(高群) とし、また一貫性度の4以下の生徒 (n=14) を「一貫性低群」(低群) とし、満足度の平均得点が高群に比べ低いのか比較した。その結果は表3に示す。

表3. 一貫性高群と低群比較

	高群 (n=23)	低群 (n=14)
平均	3.70	3.21
標準偏差	.55	.80

満足度の平均値は高群の方が高い。そこで、t検定を行い有意差の検定を行った。その際、標準偏差の大きさが違い、分散が等質と見なせないのので、仮定した2標本による検定 (ウェルチ法) を行った。その結果が表3. である (両側検定 $t(21) = 1.97, .05 < p < .10$)。したがって、一貫性高群は低群よりも満足度が高い傾向にある。

表4. 一貫性高群と低群の満足度の比較

	高群	低群
平均	3.695652	3.214286
分散	0.312253	0.642857
観測数	23	14
自由度	21	
t	1.9735	
t 境界値 両側	2.079614	

一般的に大学入試という学力面で選抜を行う以上、成績上位者は、進路決定で幅が広がるので、満足度は高いと考えられる。そこで「進路選択の満足度(C)」「成績(D)」について、成績上位群(n=13)と成績下位群(n=24)について進路選択の満足度をt検定により比較した。その結果が表4。(両側検定 $t(35) = .92, p > .10$)である。

表5. 成績上位群と下位群の満足度の比較

	上位	下位
平均	3.692308	3.5
分散	0.230769	0.434783
観測数	13	24
自由度	35	
t	0.924538	
t 境界値 両側	2.03011	

両群に有意差はない。つまり成績が上位であろうと下位であろうと満足度は比較的高く、その差はない。下位であっても十分満足していると言える。

③結果の考察

決定進路に対する満足度は全般的に高い値になっている。進路決定の要因となるものは、単に「～を大学で勉強したい」という自分の興味関心だけではなく、学習状況や担任の進路指導や家庭の都合などさまざまな要因が複雑に絡み合っていると考えられる。しかしその中で高1から一貫した追求テーマをもった者は、テーマ一貫性が低い者より最終的な進路への満足感が高い傾向にあることがわかった。

一般的に成績が上位である者は、入試で学力の保証があり、選択の幅も広いので決定進路に満足する率は高いと考えられがちだが、本校では上位、下位に関係なく適切な進路を選択し、概ね満足のゆく進路決定をしていると言える。

3. 高3での本年度の実践記録

(1)目標設定

自らの自己形成の過程を知り、主体的に生き方を選択することができる力を育てる。進路希望別の6つのグループに分かれ、学外でのフィールドワークおよび学外講師との交流会によって自分の進路決定に関わる人から直接学ぶ。また、スピーチや研究集録原稿作成の過程において、自分の将来に対する認識を深めることによって、総合人間科の目標である「自分の人生を自覚的に選択する力を育てる」ことをねらいとしている。

(2)グループ分け

高3の総人では、「生き方」をテーマに進路選択に大い

に関りのある事柄を個人研究の方法で行う。各自のテーマを集約した後、本年度も6人の指導教員のもとに、次のような6つのグループ分けを行い、グループごとに活動し生徒相互協力または指導教員の助言を通して生徒の個人研究を支援した。

- 第1グループ 人文科学系統……………20人
語学(8人)、国語・国文学(4人)、心理学(4人)に複数の生徒が関心を示す
- 第2グループ 社会科学系統……………17人
法学志望者が最多(9人)、経済・経営(4人)に複数あり。
- 第3グループ 理学・工学系統……………20人
理学部(5人)、工学部(15人)という内訳
- 第4グループ 農・水産と医・歯・薬学系統……18人
農・水産(3人)、医・歯・薬学(15人)で、医・歯・薬学では看護、薬学希望多し。
- 第5グループ 家政・生活・保育系統と
教員養成系統……………19人
家政・生活・保育(8人)では保育、児童教育志望多し。教員養成系(11人)では初等教育、保育への関心が強い。
- 第6グループ 芸術・体育・技能系と就職……………19人
美術、デザインで5人、音楽2人、体育4人、専門3人、就職3人など

(3)主な活動

前期：フィールドワーク、働く人の話
後期：スピーチ、研究集録作成

前期、後期に大きく分け、前期では自分の進路選択に関する分野の人々をフィールドワークで調査することをメインの活動とした。そのための下調べを4月のグループ分け以降、指導教員のもとにグループ内でおこなってきた。調査事項が決まると、フィールドワーク先の選定と質問事項の整理を行い、6月3日にフィールドワークを実施した。この準備とほぼ同時進行で、働く人の話を生徒に聞かせる準備が教員主体で勧められた。指導教員の一つや保護者、卒業生などから生徒の関心分野の専門家を学校に招いて、生徒に話を聞かせる試みである。次表の方々を講師として呼び出した。(敬称略)

講師名	所属、専門、その他の情報	人数
伊藤 嘉昭	名古屋大学農学部名誉教授	11
太田 修子	八事日赤病院眼科 看護師	10
吉田 直史	中日新聞 整理部	14
後藤久美子	心理カウンセラー 各所非常勤	11

木村 和子	名古屋短期大保育学科	12
犬飼 良一	建築家	18
樋口 美穂	オートリブジャパン	13
野田 哲矢	名古屋大学工学部院生	8
林 伸彦	愛知学院大学教授 経営	8
岩田 憲明	愛知学院大学教授 法律	8

後期は自分の将来のキャリアについての考えをまとめ、研究集録としてまとめる作業の途中の段階でスピーチとして発表していく。研究収録の文章の内容は、将来のキャリアを見据えた自分史を書くものであるが、生徒の中にはプライベートな内容だけに、公刊される研究集録に載せたくはないという考えをもつ者もいるため、研究収録のタイトルは①自分史的内容②フィールドワークで調べた専門的な内容の2テーマを与え、生徒に自由選択させた。文章作成の指導は国語科と協力し、国語の授業の中でも指導をしてもらった。

(4)具体的な授業日程

実際の年間授業の記録を掲載する。

- * 4月8日 5限 合同LT(進路ガイダンスあり)
6限 オリエンテーション
- 4月15日 離任式、高校立会演説会
- 4月16日 (1時間) 進路希望別グループ希望調査・第1回進路希望調査
- * 4月22日 (1時間は生徒総会)
6グループの代表の決定、
フィールドワーク先検討資料準備
- * 5月6日 フィールドワーク準備①
(生徒総会予備日)
- 5月13日 フィールドワーク準備②
学外講師検討①
- 5月19・20日 高3実力テスト LT 23日遠足
- * 5月27日 フィールドワーク準備③
学外講師決定・交渉
- 6月3日 高3 フィールドワーク
(教育実習中)
- * 6月10日 お礼状発送、
フィールドワーク報告会準備
(6月16日~22日 中間テスト)
- * 6月24日 フィールドワーク報告会
- 7月1日 学外講師グループ交流会準備、
第2回進路希望調査
- * 7月8日 学外講師グループ交流会
(7月13日~16日 保護者面談)

- (9月1日・2日 高3実力テスト)(指定校推薦 予告)
- 9月9日 スピーチ原稿・集録原稿執筆①
- * 9月16日 学校祭準備
- (9月22日・23日 学校祭)(推薦面接)
- 9月30日 スピーチ原稿・集録原稿執筆②
- (10月1日~7日 期末テスト)
- 10月9日 LT センター説明
- * 10月14日 (高校 立会演説 1時間)スピーチ原稿・集録原稿執筆③
- 10月21日 高校生徒総会
- * 10月28日 グループ内スピーチ
- * 11月4日 学年全体でのスピーチ
- 11月11日 高3 実力テスト
(11月29日~12月3日 中間テスト)
- 11月18日 第3回進路希望調査
- 11月25日 LT
- * 12月9日 研究集録原稿完成
(12月14~17日 保護者面談)
- 12月16日 LT
- 1月13日 LT 2次試験説明
(1月15・16日 センターテスト 1月23日~29日 学年末テスト)
- * 1月20日 予備日

(5)総合人間科に対する生徒の感想に見る評価

平成16年度高校3年生の研究収録中に見られる総合人間科に対する生徒の感想の抜粋を下に掲載する。

「この学校に入って私たちは6年間総合人間科を学んできました。そして学習してきた人の中にはこの経験が生きて進路が決まった人もいます。そしておそらくこの授業がマイナスに作用した人はいないと思います。おそらく他の学校の人たちは進路についてうちの学校ほど深くは考えてきていないと思います。ただなんとなく目的も無く大学に行く者が増えている現在において私たちはそのような問題を解決する最先端の学習を受けられたことは非常に幸運であったと思います。この学習で培われた力、自分の意見を述べる力、他人とのコミュニケーション能力などはきっとこれからの将来において必ず役に立つことと思われまます。」

「総合人間科という教科で多くのことを学んだ。今6年間振り返ってみると、ほとんど本意ではないにしろ長い間やってきた応用生物学。総合人間科が私の進路に大きな影響を与えたのは言うまでもないが、その進路選択においても、具体的な体験をすることで疑似体験をすることができたり、最先端の知識を得ることができた。もし総合人間科という教科がなかったら、私の進路は変わっていたかもしれない。正直、この進路選択が正しいかどうかかわからないが、今の段階では後悔することなく自分の進路を決めることができたと自負している。いつ

かこの文章を自分自身で読み返してみたとき、後悔していない人生を送っていきたいと思う。」

4. まとめと今後の取り組みへの示唆

本校総合人間科のように、個人的関心のあるテーマで自分の研究ができる総合的学習では、高校1年からテーマに一貫性がある生徒は進路決定に満足感をもって卒業する傾向が高いことがわかった。高校1年次での「総人」の指導では特にキャリアを意識した指導は行っていないのだが、結果的にはテーマに一貫性がある者は進路決定において高い満足感が得られ、キャリア教育にも成功していることになる。そのため、高校1年次から3年間を見越した一貫性のある研究テーマ選びの指導を行うことが有効であると言える。

本校は現在高1, 2, 3年で各学年テーマが「生命と環境」「国際理解と平和」「生き方」というように、文系-理系のバランスを重視した学年テーマ設定にはなっている。また研究方法も個人、グループの両者を経験できるシステムにもなっている。とくに高2ではグループ研究形式の沖縄フィールドワークがあるので、個人的関心による研究がしにくい状況である。そこでカリキュラムの観点からの提案であるが、高1では「生命と環境、国際理解と平和」のどちらのテーマでも選択可能にし、高2では「沖縄」という素材ないしはフィルターは与えるが、生命と環境、国際理解と平和のどれでも高1から一貫したテーマで追求できるようにする。さらに高3で「生き方」というテーマでキャリアを意識した研究を行い、自分がなぜこのテーマを3年間追求してきたか、これからどうそのテーマと関っていくのかなど一段高みに立ったメタ的視点から統合化するのがよいのではないか。